明治大学国際日本学部開設記念シンポジウム
2007 年 11 月 16 日（金）・明治大学駿河台校舎アカデミーホール
特別講演

「いま、日本のどこがすごいのか――国際日本学の現在と展望」

麻生太郎・元外務大臣、前自由民主党幹事長

麻生太郎です。
学長の納谷（なや）先生、学部長にご就任の蟹瀬さん、そして、お集まりの皆さん、明治大学「国際日本学部」が晴れて発足の運びとなりますことを、心よりお祝い申し上げます。

●日本の経験を言葉にする必要

本日は、開設記念シンポジウムの、キーノートをということです。
大変名誉なことでありまして、御礼を申し上げます。まことに有難うございました。

「今、日本の何がすごいのか」ということを考えるにあたり、これが、戦後 60 年だけで醸成されたのではないということを、先ず、我々は認識する必要があります。
それは 125 代にわたる皇室の歴史はもとより、長い歴史の上にたったものであります。

また、2 年間の外務大臣在任中、わたくしが一番感じたことは、世界における日本の評価が変わったということです。
英国国営放送 BBC が行なった調査では、日本は世界に最も良い影響を与えている国として、2 年連続で上位にランクインしております。
そんな現在の日本の評価にもかかわらず、日本人としての誇りを持てないというのなら、それは教育に問題があると言わざるを得ないのではないでしょうか。

さて、わたくし、日本という国は、「BEEN THERE DONE THAT の国である」、と、申し上げたことがあります。

直訳すると、「そこへも行ったことがある、あれもやったことがある」国だという、そのココロはといいますと、成功も、また失敗も、ともにいろいろとやっている。
すなわち日本には、良きにつけ悪しきにつけ、経験というものが豊富である。
例えば、ナショナリズムの扱いには、60 年安保当時の騒ぎを含め、さんざ苦労した実体験があります。
公害にも苦しんだが、なんとかかんとか、抑えこむことに成功いたしております。

そんなことから、日本は「THOUGHT LEADER の資格あり」、とも申し上げました。
THOUGHT LEADER とは、失敗によってすら、他人（ひと）に教訓を与えられる、そういう人のことを申します。訳語としては、「課題先進国」とか、「課題解決先進国」といえばよろしいでしょうか。
他人より先に、問題へぶち当たるので、そのもがく様子、悩む姿それ自体、後から来る人たちにいやでも応でも参考になる。
それが THOUGHT LEADER、課題先進国で、中国人は現に、日本のことをそういう目で見ております。

大事なのは、これを、我が国の経験というものを、コトバにすることであります。論理のコトバと

して、伝えやすく、また解りやすくすることであります。

我が国の成功と失敗と、その経験というものをコトバにし、論理化していくことが求められております今、「国際日本学部」が明治大学にできるということは、まことに時宜を得ていると、思う次第であります。

＊　　＊

●驚くほど多様な対日関心
それにしても、今回シンポジウムに参加される先生方の専攻分野を拝見しまして、バラエティーの豊かさに心底驚かされました。

江戸時代に流行した「拳」ですとか、日本人の遊びをずっと調べて、「山片蟠桃（やまがた・ばんとう）賞」を受賞された先生（セップ・リンハルトさん）がおられます。
作家・宇野浩二の研究から出発された、エレーン・ガバートさん、確かお勤め先であるカンザスの大学には、怪獣ゴジラの専門家として有名な方（ウイリアム・ツツイさん）が、おられるのではないでしょうか。

明治になってからの博覧会を、ずっと追ってこられた先生（アンガス・ロキヤさん）がおいでですし、永井荷風の足跡をたどって、東京の路地をくまなく歩かれた先生（エヴリン・シュルツさん）がおられるかと思えば、カリブ海のご出身だが、ご主人がたまたま浮世絵のディーラーをされていたという縁で、江戸版画にどっぷりつかられた先生（マルガリータ・ヴィンケルさん）がおいでです。

沖縄のことを詳しく研究されているイタリア人の先生（ローザ・カローリさん）、そして日本研究で中国を代表する立場におられる先生（李玉　Li Yu さん）と、生産技術のことを精力的に研究してこられた韓国ご出身の先生（呉在恒　O JeWheon さん）。――実に範囲が広い。

そして、この先生方の研究を通して我々は、「当たり前と思っていることが、実は当たり前でない」ということに気付かされます。
例えば、東京の地下鉄。終電近くの車内で酔っ払って寝ていても、かっぱらいに遭う確率は極めて低い。
また、深夜の日比谷公園をよく女性が一人で歩いていますが、これは、他の先進諸国では考えられないことです。
しかし、その圧倒的な治安の良さを、実は我々日本人は気付いていない。
先程ご紹介した先生方は、そうした我々の気付かない日本を、コトバとして世界に発信しておられる。

それで思い出すのですが、1970 年頃のことだったと記憶します。
例の未来学者として有名だったハーマン・カーンが、「超国家日本の登場、The Emerging Japanese Superstate」という本を書きました。そこで、日本はじきに、世界に対して大きな影響力をもつ国になると断言しております。

彼こそが、戦後日本の成長と台頭を学問として、世に問うた最初の学者でしょう。
というより、むしろその頃は、覚えていられるくらいの人数しか、日本の専門家というものは、世界にいなかったのではないでしょうか。
そういった意味では、皆様が、日本を学問の対象として取り組まれるということに、改めて敬

意を表する次第です。

＊　　＊

皆さん麻生太郎を引っ張り出して、ご期待の向きもおありと存じますから、マンガの話をいたします。

●「井上雄彦」に感激する漫画賞受賞作家たち
日本のマンガが世界の文化に占める位置というものにつきまして、わたくしは大いにいろいろと、申して参りました。
何しろあの、自分の言葉に関して人一倍誇り高いフランス人が、ローマ字で MANGA とそのまま呼び、2004 年以来、国立出版協会では一ジャンルとして正式に認めております。

そのくらいですから、外務省に、国際漫画賞という賞をつくって、マンガに関して世界一栄誉のある賞にして、育てていきたい、と考えました。
当初、外務省の役人は「この大臣は何を言っているんだ」といった顔をしておりましたが、「とにかくやれ」と、こうなりました。

そして、今年の 8 月、第 1 回の賞を出しまして、中国人の漫画家が最優秀賞を、オーストラリアとマレーシア、香港の漫画家が奨励賞を受けられました。レセプションには、ちばてつや、水島新司といった大御所も来て下さって、受賞者を感激させました。わたしにとっても、外務大臣時代の楽しい思い出になっております。

賞を受けたこの 4 人が、日本でどこに行ったか、ざっとご紹介いたします。
初日、授賞式に先立って、講談社へ行き週刊少年マガジンの編集者、週刊モーニングの編集長と話をしております。二日目は小学館。サンデー、スピリッツ、等々の編集者に会い、三鷹へ移動してスタジオぴえろを訪れました。「うる星やつら」とか、最近ではジャンプ連載の「NARUTO」といった作品を手がけたアニメプロダクションなのは、ご存知の通りです。いやご存知であってほしいところです。

その後、京都へ移動したのは観光目的もさることながら、京都精華大学でマンガが学問になっているのを見る、またそこで、有名な竹宮恵子教授に会うというのが一大目的で、京都にあるマンガミュージアムも見、宝塚に行って手塚治虫記念館も見ております。
それからまた東京へ戻り、ジブリ美術館を見たあとで、一行は井上雄彦（たけひこ）さんのところに行っておりますが、日程上最後の訪問先だったこの井上さんとの懇談が、まさしく大団円だったと、そういうことのようです。

スラムダンク、バガボンドの作家と会える。――これが、夢のような体験だったと、天にも昇る心地がしたと、そんなことだったらしい。

ちなみに、受賞した方々への賞金は･･･ゼロです。

●「気がつけば世界一」はこうして生まれる
以上のことから、2 つ、申し上げようと思います。

日本に今まで、プロの漫画家が何百人生まれたか知りません。
が、断言してよいのは、そのうち誰一人として、例えばデンマークの読者を思い描きながら、

マンガを描いた人はいない、ということです。
みな、日本人読者のために、締め切りと格闘し、脂汗をかきつつ、紙にペンで思いを綴ってきた。
世界一になりたいとか、ノーベル賞とか、誰も考えたことがありません。

そうして日本人自身、自分たちのためつくってきたマンガが、いつの間にか、世界中で若者の心を揺り動かしておりました。
残念ながらわたしのように、老眼鏡をかける世代の心まで、動かしているとはまだ言えません。が、それも時間の問題であろうと存じます。弘兼憲史「黄昏流星群」の世界を、フランス辺りの中高年が発見する日もそのうち来るのではないでしょうか。

日本に元からあるものが、いつしか世界の心をつかみますと、日本でその仕事をしている人が、自然に世界から仰ぎ見られる人になる。井上雄彦や鳥山明、浦沢直樹やかわぐちかいじといった作家の諸先生は、本人たちにそんな意識はなかったに違いないのに、気がつくと「世界一」の漫画家になっておりました。

少女マンガというジャンルになると、もっとその点、はっきりしております。なぜかというと、少女マンガというジャンルそれ自体、日本のほかには全くなかったからです。ヨーロッパの女の子たちがとりわけ日本のマンガに夢中になるわけはというと、全く新しい読書体験、精神生活を、日本のマンガが与えたからでありました。

また、主人公が成長していくマンガも日本独特のものです。
「課長　島耕作」は、今では、「専務　島耕作」に出世しております。

突飛なようですが、この話は、金沢市にご在住の石野晴紀さんにも当てはまります。
石野さんがお父さんから引き継いだ会社、石野製作所は、売り上げ 20 億円、従業員 130 人の中小企業ですが、世界一の会社です。
というのも、この会社は回転寿司で使うベルトコンベヤーをつくっている会社でして、国内で 6 割というシェアをもっております。
世界中がスシを食べ始めたら、みんなこの会社の設備を買いに来た。日本一の会社が、自動的に世界一の会社になったということであります。

カラオケの機械も同様でしょう。

日本に元からあって、日本人が深く愛しているものを、世界の人も愛するようになる。すると日本でずっと頑張っていた人や会社が、世界から仰ぎ見られる存在になる。これが、申し上げたかった第一の点です。
わたしはこれは、実に好ましい流れだと思う次第です。
なぜかというと、偉そうに押し出す攻撃的なところがどこにもない。
押し付けがましいところとか、威張ったところがない。「ディマンド・プル」で、引っ張られるようにして賞賛を勝ち得て、商売がそれについていく。理想的な循環であろうと、思っております。

＊　　＊

第二の点として、皆さん方アカデミズムに携わる方々には、この現象にぜひ分析のメスを入れてほしいと存じます。

日本で大事に育てられてきたものは、どんな要素に因数分解できるのか。どんな歴史的背景から、生まれた現象なのか。
そこまで考察を及ぼして、日本人が日本人のため育ててきた何かが世界に受け入れられるという、その現象に、論理のコトバを与えてほしいと存じます。

●パレスチナで母子手帳を広めたいワケ
なぜそんなことを言うかというと、そういう論理化する作業がありますと、「母子手帳」とか、「交番制度」とか、日本が世界に広めようとしている制度や仕組みの意味が、もっと伝えやすく、より一層理解を得やすくなるからです。

いま、パレスチナのウエストバンク、西岸で、日本の JICA が「母子手帳」を普及させようとしております。
JICA というのは、青年海外協力隊などを通じて、皆さんご存知でしょう。日本の援助で、いつも第一線にいる専門家集団です。

で、母子手帳というのは、文字通り「手帳」です。お母さんが、赤ちゃんのことを、自分の手でペンをとり、書き込んでいく、手帳であります。
その、書き込むという作業は、自分がお腹を痛めて産んだ赤ん坊を、いつくしむわざそのものではないでしょうか。
つまり母子手帳の普及事業とは、命の重さ、大切さを、パレスチナの女性達の心に深く、しみこませていく仕事です。

そしてここが肝心なところですが、生まれた日のこと、注射をした日のこと、病気にかかった日のことを、ひとつひとつ、自分の赤ちゃんについて手帳に書き込んでいったお母さんの誰が、自分の息子を自爆テロの首謀者、実行犯にしたいと願うでしょうか。
ですから日本の母子手帳とは、テロとの戦いの、武器なのであります。

ちなみに、JICA はまず母子手帳をウエストバンクに広め、その土壌のうえに、いま、農業団地建設という仕事を進めようとしています。
新鮮なトマトやピーマンを育て、それを新鮮なまま、いろんなところに運ぶ。
そのためには、イスラエルが検問所を楽に通れるようしてやらねばなりません。つまり、各国間の信頼がなくてはなりませんが、相互に憎しみあってきた関係者同士からは、突破口が開けません。それを、「平和と繁栄の回廊」づくりと銘打ち、いま日本がやっておりますが、本題からずれるのでこれ以上は申しません。

「交番制度」に話を移しますと、これの普及で成果を挙げているのは、例えばインドネシアです。
日本は交番の建物や無線機といったハードウエアを提供し、インドネシアで警察官の訓練に協力してきました。

では、その際のソフトウエアは何か。
それは突飛なようですが、「こち亀」ですよ。――「こちら葛飾区亀有公園前派出所」。
もう 30 年、続いているマンガです、ご存知の通り。
あそこに出てくる主人公で葛飾署巡査長の両津勘吉とか、巡査で、財閥の御曹司、射撃はプロ級という、ちょっと誰かを髣髴とさせるキャラの中川圭一とか、馬鹿馬鹿しくて面白いけど、

愛さずにはいられない。

警官を、こういうキャラで描ける国というのは、平和な国なんですって。
日本はインドネシアも、ぜひそういう国になってくれたらいい。そう思って、交番制度の普及に取り組んでいるんです。

どうでしょうか。母子手帳や交番制度の普及事業について、こんなふうに説明した人は、たぶんいないと思います。しかし、かくかくしかじかの制度を、なぜ日本人は大事に思っているかという、そこのところがきちんと論理化できると、普及するJICAの専門家たちには改めてやる気がわき、受け入れる側には夢がわく。そうは思われませんでしょうか。

＊　　＊

●江戸時代からある「レディースコミック」
このあいだ、漫画家の弘兼憲史さんと対談したら、弘兼さんが面白いことをおっしゃいました。
マンガが戦後、これだけ普及した理由の一つは、大手出版社が手がけたことだ、と言うのです。
世界でも、これは珍しい。
こんなことも、探っていくと深い歴史的ルーツが見つかると、わたくしなどは思います。

例えば江戸時代の、出版文化の発達ぶりです。
専門家によると、文化5年、1808年には、江戸に656軒の貸本屋があったといいます。
得意先は、1軒当たり170世帯といわれていたのだそうで、だとすると、新刊本を待ちかねては読んでいた読者層が、11万人以上いた計算になります。
当然、各階層、男女を問わず、読んでいた。貸本屋は常時100冊以上在庫を抱えていたそうでありますが、これ、みな娯楽の本です。恋愛小説あり、冒険小説あり。「東海道中膝栗毛」なんかもそうです。
「偐紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）」なんか、ありゃレディースコミックですよ、今で言うところの。

つまり日本の出版文化とは、初めから階級差別というもののない、大衆向け産業で、しかも当初から女性の分厚い読者層に支えられていた。だから少女マンガができるんです。わたしはそう思います。
こんなふうな発達を遂げた例が、世界にどのくらいあるのか、まさに皆さん方には大いに研究をして、教えていただきたいと思うのです。

ともあれこういう伝統のうえに、大手出版社がマンガ週刊誌を出すという仕事は、抵抗なく接ぎ木できたのであろうと思います。
そこから、マンガにおける徹底的な市場調査、マーケティングという、弘兼さんが指摘した大手出版社ならではのビジネスモデルが登場しましたし、もうひとつ、これはわたしなどの思うところですが、大変優秀で、鑑賞眼に富んだ編集者が、漫画家によりそうようにして共同作業するという伝統が生まれたのであろう、と。
なぜかというと、大学できちんと文学とか歴史に親しんできたような人たちが、講談社だの、小学館に入って、マンガの担当にさせられるからです。こういうことは、大手の出版社だから起きる。

浦沢直樹さんは、たった一人で浦沢直樹になったのでは、ありません。一緒に成長してきた優秀な編集者がいた。それで、日本独特の、ストーリーマンガというものがこれだけ息長く、伸びてきたのであろうと思います。

となってくると、これは皆さん、ぜひにもきちんとケーススタディをし、一つの産業として、経営分析の対象にしていただかなくてはならぬと思います。
マンガを支えるインフラとか、人的資本、経営手法というものを、マネジメントの学問対象として、大いに研究してほしいものです。きちんとできれば、シリコンバレーにおけるベンチャービジネスの分析に勝るとも劣らぬ、経営学上の大きな貢献になるのではないでしょうか。

＊　　＊

●COOL JAPAN と Web2.0 の関わりは?
この頃では、ジャニーズ系のグループ、例えば「嵐」なんかがテレビに出ると、ものの 30 分もしないうち動画クリップが YouTube にアップされて、世界中の「嵐」ファンが書き込みを始めるという現象も当たり前になりました。
わたしがよく言う J-POP がパリ、ワルシャワからリオデジャネイロまで、これだけ大いに普及した背後には、いわゆる「Web 2.0」という、インターネットがインタラクティブな世界になった事情が大いにあずかっているであろうと存じます。しかしこれなども、ぜひきちんと実証的に研究していただきたいところです。

日本人が、まさかこんなものが世界中で受けるはずのないと思っていたもの、例えば「めぞん一刻」のおんぼろアパートまで憧れの対象になる、という、そういう現象が、なぜ起きているのか。
日本人が自覚しないまま、大切にしてきたものが、世界に受け入れられるとしたら、それはどうしてなのか。
COOL JAPAN はなぜ受けるのか。
その背景分析、そして論理付けを、皆様には期待しております。

今日は、こういう点の研究に、意外と豊かなフロンティアが開け、人類全体にとって財産となるような知識が得られる可能性があるのではないか、ということを申し上げたつもりです。
改めて申しますが、明治大学･国際日本学部には、大きな期待がかかるゆえんです。
皆様の前途が実り多いものでありますことをお祈りし、わたくしの話を終えさせていただきます。

ご清聴有難うございました。